書評

平田清明

『経済学批判への方法叙説』

岩波書店　1982.10　xiv＋489＋7ページ

ことしに入って“コンメンタール『資本』”の最終巻(4)を上梓するなど，私ごときからすれば怒濤の奔騰を見るがごとき執筆活動を続けておられる著者の，これは500ページになんなんとする大著である。「あとがき」冒頭に，「本書は，1970年代とくに73～74年の在外研修期以来，私をとらえてきた問題意識を対自化すべく執筆した諸論稿を，一書に編んだものである」と記されているとおり，本書をつらぬく問題意識は，見まちがえようもなく，明確である。それは，「経済学批判への方法」とは何か，という形に約言できよう。であればこそ，次にかかげるとおりの構成をもつ本書に，著者は『経済学批判への方法叙説』という標題を与えたのに違いない。

本書の構成は次のとおりである。

Ⅰ　物象化論的「資本」範疇の批判的再措定にむかって

Ⅱ　生産諸力の弁証法――社会的生産力の顕勢と潜勢

Ⅲ　経済学批判への方法的模索

Ⅳ　個体的所有概念との出会い――労働と所有のディアレクティーク

Ⅴ　物象化と三位一体範式――「自由の王国」と「必然の王国」

最後のⅤが，初出の雑誌論文としては最も古く(1972年)，Ⅲには，本書のために書き下ろした最新の論稿がふくまれている。

さて，「経済学批判への方法」とは何かという問は，言うまでもなく，何を解明したいかという問題意識と一体のものである。見抜きたいものが強く意識されるからこそ，その方法についての意識も尖鋭にならざるをえない。著者は，たとえばⅣで「マルクーゼの言説」(p. 224)を材料に「オートメーション化→価値法則崩壊＝資本主義の自動解体」(p. 225)というテーゼを批判するとおり，鋭く現代的問題意識につき動かされていることは明らかである。そして，著者はそれ故にこそ，「マルクスが後代に遺した経済学批判としての経済学」の方法を，著者自身の「経済学批判への方法」として叙して説き明かそうとしていると言える。

そのさい，著者の論から学ぼうとする者にとっての問は二重のものたらざるをえない。著者がマルクスの方法として析出するものが，まさしくそうなのであるかということと，その「方法」が今日のわれわれにとっての経済学の方法たりうるかということである。

マルクスの「方法」を析出すること自体が，実は容易なことではない。なぜなら，何よりもマルクス自身の作業が，「著作プランの数次にわたる作成とその実現にむかっての努力。そしてみずから欲せざる中断と，みずから意識した叙述停止，等々」に明らかな「屈折の営為」であった。そうした「基礎的方法概念の重ねがさねの試行的叙述と，そのなかでの概念装置の連節」のなかから，「方法」を析出するのでなければならない。著者は，マルクスの作業を，「経済学批判への方法叙説の道程」であると見る。『要綱』と『資本』とを，そうした「方法叙説」の「草稿的表現」であると見る。(『資本』を最高の完成品として，それのみを単独に解釈するのではないこのようなアプローチは，今日では定着しているとはいえ，そのための道を精力的に切り拓いてきた1人が平田氏であった。なお，以上の数個の引用は，「あとがき」からである。)

そのようなアプローチを通じて著者が定式化(という表現を著者は好まないだろうが)しようとしているのは，「物象化論」およびそれと不可分に結合する「発生史叙述」という「方法」であると言える。

著者は，マルクスの「経済学批判としての経済学」は，「ブルジョア的三位一体範式の総体的批判」であるととらえる。そしてそれは，「諸物象の人格化と生産諸関係の物象化というブルジョア的転倒 *quid pro quo* の根底的批判である。この意味においてそれは，物象化論の体系的展開にほかならない」とする。では，物象化論とは何か。著者はこう規定する。

「この場合，物象化論とは，『質料的生産諸関係とその社会的歴史的規定性との直接的癒着』に批判的に注目し，そこでの社会的諸規定性を質料的諸関係から区別し，そのうえで，それらの社会的諸形態相互間の関連をその歴史的独自性において解明し，それら諸形態それ自身の形態運動を追跡し，それらと質料的諸関係との癒着を理論的に解体しようとする方法的姿勢である。

このような物象化論の展開は，そのそれぞれの論理段階において，またその総体において，『発生史的叙述』を必要とする」(pp. 14～15)。

「発生史的叙述」についての著者の規定をここに再構成することは，紙幅の都合上，見合わせるが，本書は，

このようなマルクスの方法がどのように貫かれているかを，相対的剰余価値と特別剰余価値，資本の生産力と労働の生産力，『要綱』における「過程する資本」の概念，プラン問題，「社会的個体」と時間の弁証法，三位一体範式などの論点をとって検証していくのである。そして，そうした方法の駆使によってそれらの問題点について何が見えてくるのかを，描き出そうとしているのである。

さてそれでは，そのような著者の作業の成果をどう評価すべきか。先に列挙した諸論点についての著者の分析から私はいくつかの見事な論理を学んだのではあるが，全体として言って，大きな不満を覚えるのである。というのは，「社会的歴史的規定性」と「質料的諸関係」とが何故に「直接的癒着」をするのかというそもそもの問題点について，著者は，マルクスの与える説明の枠内に踏みとどまっているからであり，私自身は，このそもそもの問題については，マルクスの与える説明よりもずっと踏みこんだ解析を要すると考え続けてきたからである。たしかにわれわれは「社会的諸規定性を質料的諸関係から区別し」なければならない。そして，「それら社会的諸形態相互間の関連をその歴史的独自性において解明し」なければならない。しかし，そのための方法は，マルクスによって提出されているものしかありえないのか，マルクスの提出したもので十分なのかを，問うことが不可欠だと思うのである。

このように言うことは，余りにも超越的な批判を加えることだと，受けとられるかもしれない。しかし，私の真意はそうではない。たとえば，こういう一点を取り上げてみよう。われわれが，かの「癒着」を批判し(つまり，「理論的に解体」し)，転倒して見えている世界を成立させる(たんに，“ものの見方”としてだけでなく，実践的にも)ためには，転倒性の解析は，もっと明瞭なものであってもよいのではないか。そうありうるのではないか。私には，その解析がなぜこれほどにまで晦渋なものにならなければならないかが，ほんとうには得心できないのである。

1例をあげよう。「三位一体範式」論において，著者はマルクスの文言「労働が賃労働という特殊社会的な性格を有するかぎりでは，労働は価値形成的ではない」を引いて，こう書いている。

「私たちはここで新たに，『賃労働』は価値を形成しない，ということを知らねばならない。というのは，『賃労働』とは『労働—労賃』の範式において語りだされている『労働』であって……

このマルクスの記述に従って私たちは知らねばならぬ——『賃労働』とは分配＝領有論上の労働規定であって，まさにブルジョア的な分配＝生産諸関係の適合的一表現にほかならぬのである。

この賃労働を価値形成労働と混同するのは，ブルジョア的分配＝生産関係の神秘性に，資本家的生産様式の神秘化的性格にとらわれていることを，みずから表明することにほかならない」(pp. 380～381)。

そうだろうか。ここでの問題の核心は，このように語られるべきものだろうか。マルクスの文義は，賃労働という形態自体は価値形成的でないということ(自明である)であり，賃労働という形態をとっている労働自体は，価値形成的なものであることは前提である。「この賃労働を価値形成労働と混同するのは」と平田氏は言うのだが，いったいどのような次元でどのような側面が混同されることを問題にしているのだろうか？　とりわけ平田氏はこれに続けて次のように言うのである。

「ちなみに言う。私的所有と私的所有との社会的結合という形態において，自己の対象的活動条件を得つつ現実化する人間的労働が，価値を形成するのであって，かかる社会的関係を離れた，そしてその対象的活動条件から切り離された，労働なるものは，価値を形成するものではない」(p. 381)。

そして，マルクスの「われわれが労働を価値形成的なものとして固定(フイクシーレン)するとき，われわれは労働を……賃労働という規定性とは異なる社会的規定性において，考察するのである」という文言が引かれる。

焦点は，「賃労働という規定性」とそれとは「異なる社会的規定性」とが，「社会的規定性」の次元としてどういう構造的関連にあるかを明確にすることであろう。「賃労働という規定性」と「私的所有と私的所有との社会的結合」と平田氏が言うものとの構造的関連を明確にすることであろう。そうでなければ，マルクスの文言は，ひとつの象形文字に終ってしまいかねないのではあるまいか。

大先達の雄渾な力篇に多くを教示されてきた者としては，ここではいささか舌足らずに，自分の問題意識だけを吐露するにとどまったことを，お許しいただきたいと思う。

〔岸本重陳〕